

青森いろいろ

本州の最北端、青森。青森といえバリ
ンゴ、ねぶた、津軽、
十和田湖、恐山……。
結構、思い浮かぶも
のである。地形もな
かなか興味深い場所
で、おおまざき たつびざき大間崎や竜飛崎
なんていうのも実に
興味深い。1年以上前
にはなるが、東北6県
と新潟を車で廻った



曲がりくねった奥入瀬溪流

際の青森での出来事を思い出せるだけ書いておこう。

まず私が感動したのが、十和田湖。この十和田湖に向かうまでの奥入瀬溪流おいらせけいりゅうの道が、まるでエフワンのサーキットのような道だったのだ。確かに景色は緑に囲まれ、川のせせらぎや滝の音、鳥の鳴き声なんかも聞こえてきて、心が穏やかになるのだが、おそらく車を運転している者からしてみれば、そんな景色を楽しむ余裕なんてないだろう。狭い14kmの道がひたすら曲がりくねっているのである。それに加え、観光客が車を止めて、ぞろぞろ歩いているので、運転している側からすればピリピリするのは無理もない。辿り着くまでの道のりはきついが、十和田湖も奥入瀬溪流も特別名勝および天然記念物に指定されているぐ



この日は風が強く
十和田湖も荒れ気味であった

らいなので、訪れて損することは絶対でない。十和田湖自体は日本で12番目に大きい湖とされており、深さに関しては最大深度が326.8メートルと日本で3番目の深さである。私が覚えているのは、

訪れた当日の日、
風がことのほか
強く、湖に停泊し
ていた遊覧船も
波ですごく揺れ
ていた。湖の近く
まで行くと、水し
ぶきがかかって
きたと思う。この
時も時間の都合
で、遊覧船には乗
れなかったが、こ
れだけ緑に囲ま



奥人瀬溪流の川のせせらぎ

れていて、青々している湖の情景も類まれなる印象を受けたので、非常に悔やまれる。というのも、220メートルにも及ぶ絶壁千丈幕や『智恵子抄』でおなじみの高村光太郎作の「乙女の像」が見られたというのである。しかし十和田湖の一番の魅力はやはりあの湖の蒼さである。自然の素朴さと脅威が混ぜ合わさった神秘的な感じである。この湖は火山の噴火によってできた二重のガルデラ湖である。ここを訪れたのはちょうどゴールデンウィークだったが、さすが青森だけに山の奥にはまだ雪が残っていた。

青森といえばやはり「ねぶた祭り」である。私はどうしても死ぬまでに青森のねぶた祭りと徳島の阿波踊りを見に行きたいと思っている。特にあの迫力満点のねぶたを見ずして死



緑に囲まれた蒼い十和田湖

ぬわけにはいかない。青森駅のすぐ近くに「ねぶたの家 ワ・ラッセ」という施設がある。ここに行けばわずか600円程で本物の大きいねぶたをみる事が出来る。青森を訪れたのであれば、ぜひここを見学することをおすすめする。無論、8月の祭りで実際に動いているね



ぶたをみるに越したことは無いが、観光客も尋常な数じゃないし、ホテル代だってバカにならない。祭りには参加せずとも、実際に間近でねぶたをみられたら、最高である。

そもそもこのねぶたの起源の話だが、もとはといえ

ば七夕の灯籠流しの変形ではないかといわれている。奈良時代に中国から来た七夕祭りと昔から津軽にあった精霊流しの風習が一体となって今のねぶたになったというのが最も有力な説である。あのでかいねぶたが出来るまでの過程だが、まずは歴史的な物語を題材に下絵を作ることから始まる。この次がすごい。ねぶたを作っていくという作業に取り掛かるにあたり、そのための小屋を建てるのである。間口 12 メートル、奥行き 12 メートル、高さ 7 メートルのなかなか立派な小屋である。たしかに考えてみれば、製作段階のねぶたを収納しておく場所が必要である。そして骨組みづくりに取り掛かる。角材を用いて、支柱を作り、針金や糸を使って紙が貼れるように形を作る。そしたら特殊な配線工の力をかりて、ねぶたの内線に電球や蛍光灯を取り付けていく。そしたら糊やボンドでこの骨組みに紙を貼っていくのである。その後、墨で手足、着物の襟などを書き分けていくのである。表現に合わせ、石蠟を溶かし、模様を付けていく。残った白地に筆とスプレーで色を付けていく。これでねぶたの本体は完成したので、これを装飾の施された高さ 2 メートルの車付きの台に 50 人がかりで、ねぶたの本体を乗せるのである。これにて高さ 5 メートルにも及ぶねぶたの完成。そういえば興味深いのが「ねぶた」と「ねぶた」の違いである。正直、訛り方だけの違いかと思ひ、最初はたいして気にはとめなかったが、同じ青森で「ねぶた」と

「ねぶた」という呼び方をしている人も妙な話である。いろいろな説がある様ではある。もとはといえば訛りの違いという説もあるが、私自身一番しっくりきたのが、





青森市で行われるような人型の灯籠が「ねぶた」であり、弘前市で行われているような扇形の灯籠が「ねぶた」というものである。その他にも、「ねぶた」が「ラッセラー」で「ねぶた」が「ヤーヤドー」と掛け声をやるみたいである。以前、盛岡の大通りにある寿司屋に行った際、その大将が弘前出身で店内はねぶたの絵がたくさん飾られていた。

その大将がいうには「ねぶた」がまずあって、あとから「ねぶた」が出てきたみたいなことを言っていた。故郷に愛着のある人間はだいたいいつもこういう風に言うので、ネットで調べては見たものの、書いてあることがバラバラで正直、よくわからなかった。確かに「ねぶた」もいかつい絵が描かれていて、かっこいいとは思ったが、やはり私はあの人の形をした「ねぶた」の方に魅せられた側である。

我々はこの弘前も訪れた。東北6県グルッと回ってきたが、私が覚えている限り、その土地の方言が聞けたのは弘前のおばさん連中ぐらいではなかっただろうか。そう「津軽弁」である。弘前っぽくいうのであれば「つがる」ではなく「ちがる」とのこと。私自身、とてもスッキリしたのだが、もともとは寒いのが故に極力口を開けずに喋ろうとしたことから、生まれた喋り方みたいである。津軽弁といったら国内でもかなり聞き取りづらい方言と知られているような気もするが、考えてみたら、吉幾三とか人間椅子なんかは津軽弁というイメージが付きまとうものである。

前に、聞いたことのある話ではあるが、大阪の人間は今でもみんな大阪弁を使い続けるという話である。それはおそらくプライドみたいなものがあるからで、東京の人間に染まろうとせず、自身のアイデンティティみたいなものを持っているが故ではないだろう



八食センターで売られていた魚介類



か。私はなんだかそういう気がする。それに似た感じで、大阪ほどではないにしろ、一部の古い弘前の人間は津軽弁を使い続けているのではないだろうか。あくまで私の推測である。

弘前で宿泊した夜に立ち寄ったスナックで、おばさんが、ふじのリンゴを出してくれた。たまたま冷蔵庫にしばらく入れっぱなしだったみたいだが、そのリンゴが実に美味しかった。

普通、リンゴといえば秋ぐらいが旬だとは思うのだが、5月に食べて、あの甘さというのはびっくりである。ふじは賞味期限が長く、冷蔵しておけば半年近くはもつという特徴がある。その美味しさはアメリカや中国でも大人気とのこと。全国のふじの生産量を見ると、青森は全体の半分以上を占めている。さすがリンゴ大国といった感じだろうか。

もうひとつ弘前とって、欠かせないのがおそらく弘前城である。いま弘前城は弘前公園という公園の中に復元されている。弘前公園には約50種、2600本の桜がある。これらの桜は1903年頃から植えられ始めたといわれており、現在、毎年春になると行われる桜まつりにはたくさんのお客で賑わうといわれている。そもそもの弘前城だが、現在は天守と櫓のみが復元されているため、非常に小さい。以前、訪れた松江城もそうだったが、この弘前城も1873年に発布された廃城令によって、本丸御殿や武芸所等が取り壊された。言い方は悪いが、見に行ったところでなかなか残念な佇まいであった。そのせいか、普通、お城は入場料を払って見学するものだが、ここに関してはもう北の郭(休憩所や史跡のあるような敷地)に入る際に入場料を取られるのである。おそらく桜まつりの際など、これでごっそり儲けているのであろう。まあ賢いやり方なのかもわからない。



新青森駅内のお土産売り場
大変込み合っている

あの司馬遼太郎は自身の紀行集「街道を行く」にて、この弘前城を日本の七名城にカウントしていたみたいである。やはり、わかる人にはわかるものなのだろうか。でも確かに、冬場とか雪の被った情景なんかは綺麗なのかもわからない。

青森は面白いものが、たくさんあると思う。私がどうしても1度行ってみたいのが恐山である。寺山修司の「田園に死す」などで有名ではあるが、やはりあのただならぬ存在感というか怪しげな雰囲気には惹かれるものがある。

一度目にいれておこうと、新幹線がとまる新青森駅に行った。青森駅と新青森駅は、だいぶ離れているので、車やバスを利用しなければ移動することが出来ない。実に不便である。それでも、新青森駅構内はたくさんの人で賑わっていた。考えてみれば、行こうと思えば青森にも新幹線で行けるのである。前述したねぶた(もしくはねぶた)だってやはり祭りに参加してみたいし、十和田湖の遊覧船とか、あと弘前公園の2600本の桜だって見てみたい。どうしたって、1日や2日ではどうてい全部回りきれない程、まだ見ておきたいところがたくさんある。さすがに冬場に行くのは気が引けるから、今度8月のねぶたシーズンに休暇を取って行けたら行きたいものである。



ウェバー伊安